

## 会長の時間 ●富田会長

毎年、夏になると戦争を扱う報道が増えますが、日本で戦時下ロータリークラブはどうであったか疑問に思い、『ロータリー日本 100 年史』を紐解きました。これによると、ヨーロッパでは大戦前の 1937 年に、ロータリーがユダヤ人を平等に扱ったという理由で、ナチス・ドイツによりドイツのロータリークラブが解散させられ、翌年にオーストリア、イタリアがこれに続きました。日本は 1921 年に RI に加盟しましたが、1935 年に京都で右翼が国際的なロータリーを、英語を多用する反日思想として排撃する動きがあった為、ロータリーの例会では国旗を掲げ、君が代を斉唱することになった様です。また、この時、英語に替わり、日本語のロータリーソング、「奉仕の理想」、「吾等の生業」が採用されました。この排撃の流れは全国に拡大しますが、何とロータリーが反日的で左翼とされていたことは驚きです。

日本のロータリーの父、米山梅吉は、国家が全体主義化する中で何とかしてロータリーを日本化して守りたいと行動し、1939 年に日満ロータリー連合会を発足させたものの、1940 年に静岡ロータリークラブ解散を契機に、遂に東京クラブなど全国のクラブの解散が続きました。日本ではヨーロッパの様に強制解散ではなく自主解散を選んだことも銘記されるべきでしょう。しかし、実際には、国内 37 クラブの内、29 クラブは名称を変えて存続し、内 19 クラブは 1949 年の RI に日本が復帰するまで例会を継続しました。この頃の日本のロータリーの苦勞は測り知れませんが、RI 自体も苦難の中、世界平和や救援活動を継続したとされています。

日本は 1945 年 8 月、入院中の米山梅吉は万感の思いで敗戦を迎えるとともに東京水曜会に出席し、ロータリー再興を目指しますが翌年に 78 歳で没しました。続いて、福島喜三次や、1947 年にはポール・ハリスも 79 歳で没しました。

1945 年からフランスなど 66 クラブが RI に復帰したのを契機に世界的な RI の再興が始まりました。日本は惨状下にありましたが、「七曜倶楽部」を中心に例会が続けられ、1946 年東京水曜倶楽部の小松隆会長が RI 復帰の意向を GHQ に伝えましたが、RI は対日感情や平和条約締結前であることを勘案して、時期尚早としました。しかし、国内ではロータリー復活の動きが続き、遂に 1947 年ロータリー復帰協議会が結成されました。そして、この時点で戦前から活動を続けている倶楽部が 18、会員数は 1,050 人ありました。

日本の復帰には当時のケンドリック・ガーンジー RI 会長や GHQ のマッカーサー元帥や RI の第 3 代事務総長ジョージ・ミーンズ、それに小松隆が尽力しました。

こうして、1949 年東京水曜倶楽部が東京ロータリークラブを創立し、日本はこれにより RI に復帰し、続いて、主要 6 都市にロータリーが結成され、全国に拡大して行きました。但し、RI 復帰には、日本は戦前の様に日本のクラブだけで固まることは禁じられ各クラブは RI と直結すること。公職追放者はメンバーになれないと条件を付けられていたようです。

そして、龍野クラブが誕生するのは、この後、10 年を経た 1959 年のことです。